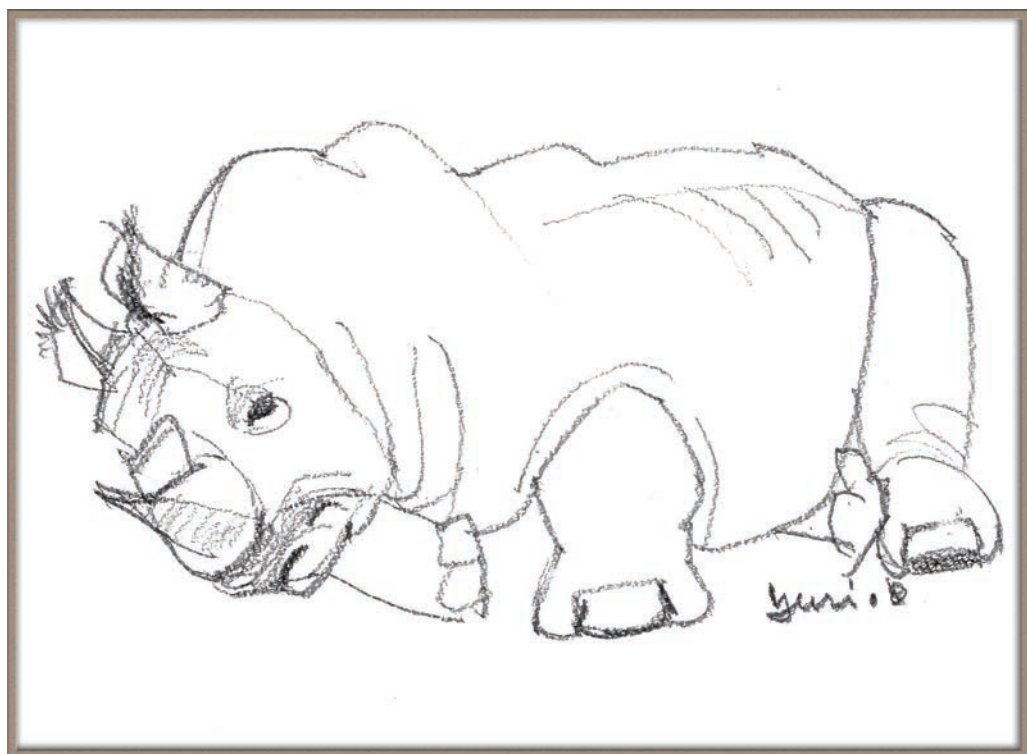


# 三河アララギ

平成二十七年

五月号

第六十二卷 第五号



ニューヨーク日記(103) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

February 19, 2015 : The White Moustache Yogurts

## Blue Shoe Diaries



今はまってるヨーグルト! The White Moustache は昔ながらのヨーグルトって感じで全て手作りなんだって。最近ローファットかノンファットのヨーグルトばかり売られててなかなかこういうヨーグルトに出会えないのよね。砂糖も入ってないからフルーツ系のもが入っていないヨーグルトは料理にも抜群!野菜とかのディップ代わりにしているエシヤロット入りのヨーグルト付けると野菜も止まらない!

I'm addicted to this yogurt by The White Moustache. It's just so good! As it says on the label, it's old world Persian yogurt. It tastes like how yogurt used to and is supposed to taste. Rich and silky. There's no additives in these, and no sugar either. So it's very versatile. Add a little honey for your breakfast yogurt, or use it as a dressing or dip with your veggies. It's great with grilled meats too. It's not distributed widely so it may not be the easiest to find but I've seen them at Murray's and at Union Square Whole Foods.

# 目次

## 第六十二卷第五号(通卷七三七号)

表紙 犀  
 ニューヨーク日記(103)  
 感銘歌 御津磯夫第十歌集  
 歌集「スモン」  
 春の潮  
 桜桜桜  
 落椿  
 ひとり時間  
 風の径  
 蒲公英の花  
 本栖湖  
 春休み  
 白ライラック  
 変わり目  
 桜餅  
 余韻  
 弥生空  
 弥生雛月  
 開花宣言  
 白玉椿  
 区切り  
 バイモ咲く  
 思ひのままに  
 御御御付け  
 伊賀上野(2)  
 卒業  
 土筆つくつく  
 『ことよせ』  
 私の一首

今泉 由利 (2)	Blue Shoe (4)	大須賀寿恵 (5)	岡本八千代 (6)	今泉 由利 (7)	弓谷 久子 (8)	青木 玉枝 (9)	内藤 志げ (10)	林 伊佐子 (11)	鈴木 孝雄 (12)	安藤 和代 (13)	遠藤 脩子 (14)	伊藤 忠男 (15)	森岡 陽子 (16)	清澤 範子 (17)	足立 晴代 (18)	近藤 映子 (19)	富岡 和子 (20)	半田うめ子 (21)	杉浦恵美子 (22)	平松 裕子 (23)	山口千恵子 (24)	小野可南子 (25)	夏目 勝弘 (26)	阿部 淑子 (27)	白井 信昭 (27)	いーはとぶ (28)	安藤 和代 (30)	小柳千美子 (30)
-----------	---------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

現代学生百一首(二〇一四)  
 『俳句』

かさね吟行会「飛鳥山公園」三月  
 【招待】

『歴代天皇御製歌』 (三十六)  
 『酔いの徒然』(37)  
 ある自然科学者の手記(36)  
 絹の話(54)  
 短歌に詠まれた茂吉 四十三回  
 伊賀上野(2)  
 「水魚」のことから(173)  
 ことのはスケッチ(437)  
 編集室だより(二〇一五年三月)  
 和菓子街道(103)  
 お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定

東洋大学 (31)	松井 周二 (32)	山元 正規 (32)	池内とほる (33)	今泉 由利 (33)	川井 素山 (33)	小柳 美子 (33)	重野 善恵 (34)	田中 清秀 (34)	森岡 陽子 (34)	柳田 浩一 (35)	米田 文彦 (35)	正岡 子規 (36)	田中 清司 (38)	小池 清司 (38)	植村 公女 (38)	千 利休 (38)	貫名海屋資料館 (39)	丸山 醉宵子 (40)	大橋 望彦 (42)	今泉 雅勝 (44)	鮫島 満 (46)	山本紀久雄 (48)	夏目 勝弘 (50)	岡本八千代 (51)	今泉 由利 (52)	三河アララギ (54)	平松 温子 (55)	お知らせ (55)
-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	--------------	-------------	------------	------------	-----------	------------	------------	------------	------------	-------------	------------	-----------

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

朝かげにまひる光りに夕映に咲き垂り重なるわがさくら花

P 170

ひるもすをまた夜もすがら淡々とわれの臥処は花あかりの中

P 170

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

海の上を渡り来れる朝風に母に手向くる香なびきつつ

相共に心とけ合ひ帰りゆきぬ五月の風は麦渡りつつ

麦の穂のゆらがぬ青き夕べにて鳥ら相呼ぶ裏庭に立つ

## 春の潮

蒲郡 岡本八千代

歩くとも歩かぬともなく歩みきて稲生の海の船泊まりの処とこ

来てみれば稲生の海の春の潮ただ遠々と昼の引潮

御津の海豊橋の海のひとつづきしろじろとして遠き一色ひと

春の潮のかすみ光れるほの光君君らとの名残りはつづく

ホシハジロいづくに去りしか目の前に汀みぎはの汐には三つ四つ五つ

ホシハジロけふも残れる五つ六つ浅瀬に白き胸のちらちら

起きがけの水の一口に咳こみつつ朝の台所に動きはじめ

やうやうに小さき雛様仕舞はむよ手元にまでも春陽照りくる

ホームの名「みかんの里」をはじめて知る訪ねてゆかむ君が居るから

何事のありつつもまたその日過ぐと「みかんの里」を下りつつおもふ

## 桜桜桜

東京 今泉 由利

錦絵と重ぬる景色の中にゐる近づきゆかむ昔への心

切り株に座りてゐたり桜木のこの木の未来終りてしまふ

桜木のもてる素質の桜色染めにし布を纏ひて今日は

真地球に腰をおろせり真地球に咲き満つ花を眺めてゐたり

無限とも流るるなかのひとひらを目追ひ失ふ積れるなかに

ごつごつの苔むす古木太幹にひと花咲きぬ初々咲きぬ

飛鳥なる花咲き初そむるときに来よ桜御飯を炊きて待つゆえ

食器棚の奥の奥より取りいだす桜切子に口ゼのシャンパン

花びらは雪か嵐か吹き飛べりその面影を私に残す

幾万か花満つ桜に寄りたりき苔むす古木の多きを憂う

## 落椿

豊川 弓谷 久子

幼なき日の桃の節句よ土雛と母の作りしいが饅頭

お水取の済むまでは寒いと年毎に言ひつつ今年も風花の舞ふ

古い母の終の住家の庭先に年毎咲きたり雪柳の花

母の歳まで生きたしと願ひその歳を我は越えたりはや六年

老いてより短歌を詠みし母なりき心通ひて幸せなりき

心にゆとり歌詠みて見むと母の歌たどたどして只なつかしき

ぬくもりの残る手握り泣けたりき名残りも告げず逝きにし母に

母逝きて思ひ出のみの残りたる故郷は遠し杳かに遠し

長泉寺山門に入り行く落椿の花の間を縫ひながら

裸電球の暗き納戸にこっそりと江戸川乱歩を読み更けりをり



## ひとりの時間

新城 青木玉枝

山里にふたたびの春迎へたり田舎に中々なじめない日び  
静けさと侘しさを比較して矢張り都会のリズム恋しき  
好きで来て好きで帰りたい今更に悔むも出来ぬ今更ながら  
年老いて健康だけは果つる迄人手も借りず生きてゆきたし  
お蔭様老いても腰もまがらずに六十代かときかれる嬉しさ  
早寝した事なきわたしは一人の時間読書に編物心おきなく  
話声一つだになき夜のしまシャンソンの流れ一人きく夜々  
静けさを消してサイレン音高く通りすぎたり豊橋方面へ  
枯原に青きが日々に増してゆく足裏あうらに春の訪れを踏み  
頬ほに受く風は今だ冷たいが手をかざし見る山並のかすみ

## 風の径

豊川 内藤 志げ

夫と嫁葱の出荷に追はれいる明後日には父の五十回忌

何よりも混ぜ飯を好める父なりき五十回忌の霊供の膳に

車止に足が斯りて仰向に倒れてしまるぬグキ骨の音する

つかの間をこのままにしてと横たはる夫と一緒に一まず安堵

西風吹くも縁側ぬくし暑々のタオル揃えて沐浴をせり

久しぶり裏の雨戸を開きたり藍に清しき本宮の山

藍清し本宮山の中腹に帯なす雲の白々として

本宮の白々雲は頂きをかすめて細くたち登りゆく

竹も木も鎮もる空の白雲は東に西に動きの速し

庭隅の金柑の根本は風の径ラッパ水仙蕾ゆれゆれ

## 蒲公英の花

岡崎 林 伊 佐 子

思ひきりほほくらませ蒲公英の毬ふきてみる老いの戯むれ

しゃぼん玉吹き散るごと蒲公英の絮毛とびかふわが目の前に

田の中に農家の人の捨ててある大根に咲くむらさきの花

まふたつに空を分け行く飛行雲夕陽をあびて白く棚引く

鳴きながら尾を振り近づく紋鷓老いたるわれにさゑづりてをり

匂ひなきままに乾きし鷄糞を元肥もとじえにしてジャガ芋植える

閉ざしたる廃屋ならぶは古里に彼岸の今日は椎茸収穫

田舎では「ぢぢばば」と呼ぶ春蘭のひっそりと咲く春寒き山

後の世の木繁き山を夢にして老いたる二人は間伐をする

町に出でて歩み久しきふる里の亡びし村の過ぎし日しのぶ

## 本栖湖

沼津 鈴木孝雄

低気圧東に抜けて春風呼び青空に映えるミモザの黄花

ジャガイモの畝の一角土にひび夕鶴想いて剥がすを止める

朝は晴れ午後積乱雲で暗くなり春雷鳴りて雨が雹に

惨めにもサンチュの葉は穴だらけ雹の爆撃さぞ痛かったろう

下部より本栖湖寄って快晴の湖水静かに富士山映す

パソコンのウィンドウズが不具合に初期化を機に垢を落とそう

リカバリー頼りすぎたばっかりに消えたデータの手入力

卒業後半世紀たちキャンパスに大隈公は今もどんと立つ

半世紀おき歲月流れ目に付くは雀荘消えて本屋目立たず

ホームにてチュウした二人小走りに上りと下りのこだまに乘れり

## 春休み

大阪 安藤 和代

春休み孫の揃えば腕まくり桶いっぱいのちらし寿司つくる

紅梅も開き初めて孫は今日就職活動に勇み出でゆく

野菜室の菜花は今朝は首もたげ小さき黄があまた咲きおり

次つぎとアパート建ちゆく町内に昭和の町並みなつかしみいる

春の陽が遠く温室に反射して吾がガラス戸をまぶしく照らす

雨晴れてひときわ声高鶯の窓すれすれに横切りてゆく

杏の花犬も鼻先くつつけてクシユンとひとつくしゃみをしたたり

御先祖の守り来し土地売却と決めし部屋に聞く夜鶯の声

パソコンもインターネットも苦手なれば孫に教えられる日びとなりたり

美容室の鏡の横顔母に似て叔母にも似てをりじつと見つむる

## 白ライラック

蒲郡 遠藤脩子

枯れを案ず素心臘梅枝々に雨に濡れつつ小さき緑が

臘梅の種子播き七年目花咲くを待てど似げない木のさま葉のさま

アネモネの白きがひと花日溜りに静けさ凝縮せしが如くに

紐張りてのわが剪定になる生垣の要カナメモチ藪モチきつちり赤芽出揃ふ

挿し木して鉢に根付きしサクランボひと枝に初めて五つの花

放し飼ひ二羽の子兎にわが挿し木マーガレットは食べられしまひぬ

常緑のオガタマの木の下陰より一重のヤマブキ輝く黄の色

朗読の友Sさんに教へられし西王母といふ椿の花の名

雨戸繰る朝ごとわが白ライラック数多の蕾ふくらみを増す

箏曲の発表会に賛助出演袴着け夫は尺八を吹く

## 変わり目

大阪 伊藤 忠男

朝もやに霞む窓見てまどろみを楽しむ心我にありやと

足痛み脈搏乱れ息切れも歳変わり目季節のせいか

変わらねば成長なしと誰言えど変わる恐さに己を変えず

目覚めても温もり恋し春はまだしばらく床で夢を楽しむ

冬寒く夏暑きこと異常なりこれとて人の仕業なるかな

稚魚の群たどり着く先どこなるや気がかりなのは家の食卓

包葉に守られ寒さしのぎきり今は我が世と花開くとき

振り返り花の開花はいつなりやただただ歩きただただ進む

大阪に暮らし大阪何一つ知らずに過ぎる栄えたところを

愚痴は愚痴所詮変わらぬこの世とてまだある役目我が夢の素

## 桜餅

東京 森岡陽子

同列にイギリスからと京都からと双羊尊が出合うは奇跡と

春野菜籠に盛られし天ぷらは食して苦味灰汁は美味なり

春めくも芒の立ち枯るその原も足元青草花めばゆる

鳥達は春を喜び囀て枝に飛び舞い枝に舞い飛ぶ

薄日差す苔むす梅の古木にも濃い紅色の花が咲初む

大和屋と葬儀の時も大向う梅初む時期に突如去り逝く

友と共玉川土手でよもぎ摘む草餅の色緑あざやか

春が来た花粉混じりの風に乗り河津桜の花を咲かせに

豪農と言はれし旧家の座敷には代々伝はる雛飾ひいならる

川端の長命寺なる桜餅三枚の葉に包まるる



## 余韻

春日井 清澤 範子

堤防に添ひて歩く散歩道桜の枝先確かめながら

桜のふくらみ確かめながら歩く道コース定めて万歩計つけて

小鳥なく声に目覚める吾が胸のさあ晴れやかに朝餉の仕度

床の中足温かなり今日の吾の散歩の余韻足に残りて

平凡に家事を片付け歌を書き胸一杯の最善にいる

軒下をゆるする風にもリズムあり寒さ感ずる今宵吹く風

足腰が不自由なるに楽しみは旅番組の映像を見る

低気圧は三つ一度に発達し寒さを告げる予報士の解説

久し振りに気温上りて散歩する公園は吾一人にあらず

ぜんざいの甘味程よく定まりぬお碗にそそぐ三時のおやつ

## 弥生空

東京 足立晴代

梅散りて蕾ほころぶ花ありき何時の日咲くや指折る吾は

日々変る空見上ぐれば遅咲きの梅ひそやかに白々とあり

玉堤桜並木の続きゆくふくらむ蕾陽と風うけて

花冷えの雨となりたる夕暮に深き紫木れん咲きぬ

冷え冷えと星なき空に花火の輪描きて咲けり木れんの花

広き野に菜の花咲きて敷きものごと風波の流れさわやかにして

沈丁花ゆき過ぎて香るほのかなる春の訪れしみじみ思う

弥生空雛見送りて桃の花まためぐり来る日を夢に見て

健やかに歩きと乗りもの乗りつぎて通う体操帰りはへトへト

父母と夫の回忌につくぐくと残せし言の葉なつかしきかな

## 弥生雛月

名古屋 近藤映子

君が妻亡くせし想い我が夫を亡せし吾の思いに似たるや

お彼岸に息子親子の来訪に共に西明寺参りは嬉し

孫麗美と彼岸参りに西明寺息子夫婦と共の時間を

孫麗美はバアと吾の顔を見てつぶらな瞳丸くして

彼岸過ぎ我八階のベランダに二匹の亀大小はウロウロ

弥生の日日に日に陽色の変り明るみて陽ざしぬくもる

診察日きまつて医師は吾の手に「僕の手握って」と力をためす

吾の手は何時も冷たく医師の手ホッコリ温かし

各々のエリート生も此の今は互いジジとババと成りたる

この春を生きたればこそ再会の楽しみ有医師に感謝を

## 開花宣言

東京 富岡和子

春寒く小雨けぶりて止まぬ朝残り金柑スズメあつめる  
梅かおり新建立の式典場鐘楼古色貫祿そえて

ゆらりゆら春陽ゆたかに濠ばた皇居の松と観光バスと  
青空と光る水面みずとり等日比谷通りの信号の赤

久久の母の里では墓まいりスマレあちこち露の臺摘み

まず先に桜の蕾点検す開花宣言その日の朝にも

二ツ三ツ開いた花に朝日さす冷たい風は去りいく気配

町会の回覧板をお隣へ縁側ぬくみしばしの会話

忘れごと増るばかりで日が暮れる亡母口ぐせ「すぐやる課」です

花見頃花壇のごはん肥料忘れずに諭し実践花の先輩

## 白玉椿

新城 半田うめ子

はらはらと舞ひてゐるなり前畑の白玉椿の美しくもあり

モロヘイヤ前畑にてつみて居り健康に良きとの友より聞きし

楽しみて咲夢茶屋孫の香奈と食事を<sup>さき</sup>するなりやさしき孫なり

館山寺時々なりぬ孫香奈のやさしき行い楽しむ吾は

杉山の会館なりて老人会<sup>よ</sup>寄りあいし時々あるなり

預りし空<sup>から</sup>の袋を知らずして参<sup>さん</sup>千円不足こまりたり

## 区切り

蒲郡 杉浦恵美子

春の夜の転た寝醒めて雨を聴く烈しけれども濡れねばまた佳し

仕事をば持たぬ身なれど三月は年度の終り反省多し

嫁様に先立たれたるかなしみを身に纏ひつつ媪歩めり

没後四年各地の十人山仲間主は居ぬのに集ひて下さる

夫のため集ひて下さる山仲間我が知らぬこと交々語る

我が夫は如何な斜面も怖がらぬ滑走したとかわたしは知らぬ

駆け抜けし命なれども我が夫よ山の仲間と濃密な日々

我が夫よ山の仲間の夫々に幾多の思ひ出遺してゆけり

宴果てて夫々帰るを見送りぬ再び会ふことあるのかしらと

夫居らば何うして居たかと思ふまい今日を区切りに新たなわたし

## バイモ咲く

豊川 平松 裕子

竿につく梅の花びらもともに拭ひ洗ひ終へたる物を干しをり

玄関に床の柱に水屋にも椿の中にて今日のおけいこ

形など構わず活けし一輪の椿は器にしつくりなじむ

春の風入れむと北の窓に寄り背戸の媪のゐぬを思ひぬ

誰のために鳴き続けるか背戸の藪の鶯たちよみいちゃんは居ぬ

時おりはつまづきながら八才の律の弾く曲アラベスクとぞ

九十を三つ越したる先生の炊きしおじやを残さず食みぬ

よぼよぼと杖つきて来し先生よ我におじやを届けくれたり

免許証を返上したと告げに来し帰りゆく先生の歩みおぼつかなし

我の他に見る人のなきバイモ咲く緑の中に緑色して

思ひのままに

豊川 山口千恵子

久しぶり抹茶をたてていただくかむ近江八景糖なる落雁の菓子

淡紙に包みてほのかに甘き菓子甘さは心を豊かにする

露の臺長く伸びつつ花の咲く陽射しやはらか枯れがれの畑

胸打ちて未だなおおらぬ痛みあり胸に掌あてて眠らむ

しとしと降り出したる雨の音枕元に聞きつつも少し寝てゐむ

離れたるこんな処に種のとび弱々花咲くピンクのシレネ

高校生大学生になりし孫はばたきてゆけ思ひのままに

大学の工学部に受かりしと電話の声は低き孫の声

音楽科選びて入学せし女孫朝早きを苦ともせず一年

ニューヨークを一人旅してゐるとしたためて色鮮やかなクリムトの絵ハガキ



御御御付け

豊川 小野可南子

吾を呼ぶ声は何処か見廻しぬまず左の耳をたよりとしつつ  
もうすぐにもうすぐ春がやってくる庭道ゆるぶ我朝戸出の  
昨日より今朝のみどり芽いかほどか日本桜草の鉢を見守る  
伸び始めの日本桜草のみどりの間ミツ蜂ひとつもぞもぞと這ふ  
萌えいづるこの若芽にも蜜あるか桜草の鉢を離れぬ蜜蜂  
菩提寺の白木蓮のこの花を見上げて私に春は来たれる  
ひっそりと我小庭に咲きはじむ貝母の花の淡きみどりよ  
白川の細き流れを縁取りて辛子菜菜の花の厚き黄の色  
帰り来し夫は差し出す若みどり御初物なり惚の芽にして  
御御御付けのその降し際に惚の芽をそつと沈めて緑たのしむ

## 伊賀上野(2)

豊川 夏目勝弘

俳聖殿と写すことなく大木の根本の苔の緑にピントを

見上げつつ俳聖殿をめぐりゆく杖つくみ姿を思ひに描く

要害の地と言ひしを思ひつつ上野城より360度

なぜこんな雑な石組と天主を見上ぐ名手の築きしに理由あるらん

築城に集めし石が苔むしてあま残れりそこにもここにも

網棚より忍者の人形みつめぬる電車の乗客少なかりけり

象干潟を舟にて巡りしは芭蕉翁われは田中の道を歩めり

季語のもつ深さを知りし旅なりき月ヶ瀬の梅の下ゆける日近し

一杯の酒のむ店の見つからず早ばや上野を立ちてきにけり

## 卒業

横浜 阿部 淑子

大学の孫娘達卒業のよき日迎えて老いの身忘る

輝き号左右に山海見物みせながら自然との共生スピードアップ

桜花咲きそむ知らせに喜べど冷たき風に花びらふるう

検診に向かう車の行く手には真白き富士が見守りており

憂いおりし検診の結果は良好と夫はハッスル高き股上げ

## 土筆つくつく

豊川 白井 信昭

わが町の衣料品屋の店閉まい今日が最後と靴下を買う

朝な朝な堤防を行く散歩道交わる処土筆つくつく

梅の花今が見頃の隣畑目白つがいの番かキユキユと鳴く声

春の日を部屋に和みて集いたる我らが親戚十五人余り

温かき彼岸入りの夕間暮れ門口に安らう花明かりして

『いんよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

スマートフォン今日は忘れて友とゐるいつもと違ふこれまた楽し  
夫人会の役やめてより四年過ぐ今日はわが内の窓の雪見つつ

鈴木美那子

再びに道後に来たりて時雨けり今宵は漱石泊まりし「鮎屋」に  
べそかきて一升餅を背おいたる幼と我らの道後の鮎屋宿

鈴木幸子

日本人を人質にせしとテレビには解らぬ争ひアメーバのごとく  
わが町にも防犯カメラ付きしと聞く俯き歩まむ空ヶ谷の道

牧原正枝

きさらぎに小さき新ジャガ丸茹し今年も味はふ今宵も二人  
むが庭の老木の梅の枝々に一面のつぼみみなうすくれなる色

岩瀬信子

病室の窓より見ゆるバイパスの光は続く車の流れ

大寒の底冷え続けど日溜りに読書の時間ひとり満悦

石田文子

山々に遠く見ゆるは花かしら木々の枝々かけふの四温日和よ  
桃色の濃きシクラメンの花鉢をわが部屋に置く甘雨ふるけふ

森 厚子

久々に会ひし友との挨拶が長き時間の空白埋めり  
街をゆく人らもわれも空仰ぐ風にまじりし雨あやしみて

山崎 俊子

「薫翠」とふ線香と祖父に供へむとけふは堺より孫娘来たれり  
折節に心かすめり結願に高野に詣でしあの日のことを

三田美奈子

滔々とメコンは流るる悠久の人の営み呑み込みてなほ  
ベトナムのホテルの部屋に独り居てテレビに流れる日本探せり

水野 絹子

知らぬ間に臘梅の花咲きてをり春の気配は確かなるもの  
庭先の大根切干喰みてみるたちまち広がる甘き香りが

牧原 規恵

スーパーに露の臺をば見付けたり春は近しの小さき幸せ  
おほ方は病院通ひの人達か我もその中朝のバスかな

稲吉 友江

## 私の一首

居てくれる唯それだけでそれでいい夫と見る庭の千両あかい

安藤和代

二月号より

結婚して四十八年病気と言う病気もせず家の為子供の為と働いてくれた夫、時には意見が違い会話のない時間もあつた。そんな夫が病みて一ヶ年が過ぎようとしている。数年前なら当前消えた命であろう。医学の進歩をありがたく思うと同時に本人の努力にも拍手をしたい、自宅で養生の今、今年二人で見た庭の千両の紅はいつの年より増して美しかった。来る年もくる年も二人で千両を見たい。

春風に辛夷ふわふわ咲き出でて輝き渡る花の白さよ

小柳千美子

無垢の白さで辛夷が揺れている。ここ数年咲きそろう前から風になぶられ、鳥につつかれ哀れな姿を見せていたが、今年は無傷のままふつくらと美しい。おっとりとした花は、和やかさそのものとなって私に笑いかける。

辛夷が散る頃、私は遠くの町で今までは違う生活を送っているだろう。まるで別れを知っているように、忘れないでとささやくように辛夷の花が優しく揺れている。

現代学生百人一首(二〇十四年) 東洋大学

国境を気にしてしまふ私たち大空は壁がないのに

光ヶ丘女子高等学校二年(愛知県)

磯部日菜乃

「先生」と私をにぎる小さな手保育士の夢決意した夏

光ヶ丘女子高等学校三年(愛知県)

林 奈維

あとひとつアウトが取れぬ苦しさにホームベースにかげろうゆれる

滋賀県立高島高等学校二年

藤原みな美

隣より斜め後ろの席がいい黒板よりも目に入るキミ

大阪府立岸和田高等学校一年

川<sup>かわ</sup>端<sup>ばた</sup>佳<sup>か</sup>織<sup>おり</sup>

「本日も猛暑になります」予報士の声におびえる今日が始まる

岡山県岡山一宮高等学校一年

榎本園香

『俳句』

啓蟄の土のにほひを確かむる

松本周二

薄雲に流れてゐたる春の月

春昼や一刀彫の円空仏

芹引くや水の香りを諸共に

山元正規

天平の礎石かげろふ国分尼寺

いつの間に止みし雨おと春障子

ビル工事起重機止めし春疾風

池内とほる

やはらかなひと雨ごとに梅開く

医療費の控除申請春寒し



カーテンを開けてまた見る春の月

今泉由利

ぜんまいはのの字のままに食みにけり  
すっぽりと梅の香りの中にある

春光を背にしてコインランドリー

川井素山

春寒や着ぶくれ僧のはや読経

引売りの鉢植ゑに盛る春の土

鳥あまた挙りて河津桜かな

小柳千美子

木の芽雨寄添ふ鳩の薄目かな

軽やかに髪切る音の春めきぬ

草木の芽濡れて先端光りをり

重野善恵

春の雨時刻む如樋に落つ

人波に躓いて酔ひたる梅見かな

立ち膝の観音像や春日和

田中清秀

我がそばに姿を見せぬ初音かな

春寒や合掌の手をすり合はす

睨み合ふ硝子戸真中に春の猫

森岡陽子

花役者忘れ雪如幕に消ゆ

地虫出づ雀啄小雨なか

山鳩の今朝も番の三月や

柳田浩一

紅梅や濃きも淡きも花満つる

春空に伸びゆく枝のうすみどり

屋根越えて飛ぶ新聞紙春疾風

米田文彦

春光やキャッチボールの放物線

柔らかききらめき無限春の海

土器かわらけに花のひつゝく神酒おみき哉

正岡子規

霞かすんだり曇ったり日の長さ哉

故郷ふるさとやどちらを見ても山笑ふ

かさね吟行会

「飛鳥山公園」三月

山本正規 選句  
田中清秀 吟行記

うす紅の蕾ふくらむ花見かな

清秀

花の道行くほどに咲く日和かな

とほる

「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」古今和歌集にある在原業平の有名な短歌である。古よりその美しさ故に日本人の心を悩ませかつ愛されてきた桜、日本の国花であり花といえば桜を指す。その種類も数多く白や薄紅、濃紅色、また八重咲きの品種もある。今回のかさね吟行は花見会として王子にある飛鳥山公園において開催された。

平成二十七年三月二十七日、参加者は松本周二、川井素山、米田文彦、今泉由利、森岡陽子、池内とほる、和田勝信、山迫京子、重野善恵と筆者の十名であった。残念ながら桜は未だ二分咲きであったが天候に恵まれ暖かく麗らかな日和である。

飛鳥山は八代将軍吉宗が享保の改革のひとつとして江戸庶民に花見を楽しんでもらおうと千本以上の桜を植えたことが始まりで現在に至るまで桜の名所、憩いの場として親しまれて来た。当日も頂上付近の公園では家族連れ、春休みの子供たちなどで賑わい、色とり取りのシートを敷き手作りの弁当やおにぎり飲み物などを持ち寄り和気藹々と楽しんでいる。幼児の頬の米粒を母親が取る微笑ましい風景、シャボン玉作りに興じる子供たちなど長閑である。

しやぼん玉割れて光のひとつ消ゆ 文彦  
飛鳥山笑ひ初めや花少し 善恵  
花びらは紙のコツプの盃に受け 由利  
待ちかかぬる祭提灯花の客 とほる

初花の梢にうすく揺れており

素山

公園の奥には明治時代経済界に多大の貢献をした渋沢

栄一が三十年間ここに居を構えており、晚香廬、青淵文庫のみであるが邸宅の一部が現在も残っている。付近は静かな庭園で気品ある雰囲気、特に晚香廬は国の重文指定を受けた高貴な気品ある建物である。

ひとひらの花弁恵むや白もくれん 周二

老木は命伝へてひこばゆる 陽子

万の奮風の先より花ひらく 京子

また、飛鳥山の周辺には住宅街と商店街とが立ち並び、その交差点には一輛編成の可愛らしい路面電車が行き来する。最盛期には四十一系統総延長二百三十三キロあった都電も今やこの荒川線が唯一残っている路線である。

春風や路面電車の軽き音 文彦

春風や都電の音も途切れ勝ち 勝信

公園散策の後、熊野信仰の拠点となった王子神社、王子の狐で有名な稻荷神社へと足を伸ばす。昼食は老舗の

「越後屋」で蕎麦懐石に舌つつみを打ち、ここの宴会場を借りての句会となる。囀目三句、春の思いを十七文字に込めて各自の力作の披露である。

句会の終了後、王子駅近くの高層ビル「北とぴあ」十七階の展望台から暮れなずむ都会の景色を眼下に眺め、併設されたレストランで遠く富士の山の夕景を望みながら甘党と辛党に分かれて作句の成果と反省に暫しの時を過ごす。

次回の吟行を楽しみに散会となった。

■かさね吟行会■

日時 五月八日(金)

場所 洗足池

集合 十一時 池上線洗足池駅

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『招待』

小池清司

鼓打つ仕草さのままに雛納む  
膝並べ花見疲れの足湯かな  
中吊の色どり増えて風光る

植村公女

黙禱のまなうら春の水流る  
啓蟄の影のびてゐしポストかな  
交番に道尋ねをり春の雪

千利休

ならひつゝ見てこそ習へ習はずによしあしいふは愚なりけり  
茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝのむばかりなる事と知るべし

## 「歴代天皇御製歌」(三十六)

貫名海屋資料館

『後冷泉天皇』第七十代・在位 一〇四五年(二十一歳)―一〇六八年(四十四歳)

後冷泉天皇は、第六十九代・後朱雀天皇の第一皇子。母は藤原道長女藤原嬉子。紫式部の娘大式三位と呼ばれた藤原賢子を乳母とした。天皇は政治を藤原頼通に任せ、自らは、けまりや和歌に夢中になっておられた。永承年間に三度の内裏歌合を催行された。

この御世、京都宇治平等院鳳凰堂が落成。仏師・定朝作の鳳凰堂阿弥陀像が出来上った。「更科日記」「堤中納言物語」など平安後期の代表作が成った。

「新撰朗詠集」「後冷泉院御記」に歌を残された。

逢ふことはたなばたつめに貸しつれど渡らまほしきかささぎ鵜の橋

後拾遺集

七夕のように、私も鵜の橋を渡って、あなたのもとへゆきたいものです。

○鵜の橋とは、鵜が翼を並べて天の川に橋を渡すという伝説。

岩間よりながるる水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき

後拾遺集

賀陽親王の邸を訪ねられた時、石に滝落しなどされ、九月十三日夜の月の光をながめられた。

『酔いの徒然』（二十七）

丸山 酔宵子

『真昼間（まっぴるま）からのモツの味』

自由が丘周辺には隣に田園調布が控え周辺は高級住宅地に囲まれているが、東急線でチョットと足を延ばせば、呑兵衛にとっては堪らない一角がある。

「ネエ・・知ってますか・・。 2時過ぎからやってくるモツ焼き屋が武蔵小山にあるんですよ。奥も深くムサコ暗黒街と言う妖しい一角もあるんですよ・・」。大手外資系証券会社のディーラーでしこたま儲けて、現在は悠々自適。最近ソムリエ・エキスパートの資格を取得したワインお宅のIさんである。

夕刻から雪になるとの天気予報で、木枯らしが吹き荒れる昼過ぎ、完全武装でいざ武蔵小山へ。ホームを出る

と、目の前には東京で一番古い豪華アーケード街が賑々しく続いている。早速駅前の路地に入ると、おおっ！細い路地裏に昭和レトロ風情が漂う飲み屋街が出現。お目当ての『牛太郎』の大きな濃紺の暖簾が、強い北風で絡まっている。

表の看板にはプロレタリアート風旧字体で「働（人に力）く人の酒場」。恐る恐る暖簾をくぐると、薄暗い裸電球、セピア色の壁そして中央の厨房を取り囲む年季の入ったコの字型カウンター。ほぼ満席の中、やっと隅に席を確保し、先ずお酒を頼もうと声を掛けると、「チョット待って！こっちから声を掛けるから！」と実にそっけない、が、何故か嫌味っぽくない。暫くして、「はい！注文どうぞ」。先ずは「ビール」そして取り敢えず、「ポテトサラダ（120円）」。量も多く、玉ねぎのシャリシャリ感と黒胡椒のスパイシーさが秀逸。「モツ煮込み（110円）」は臭みがしっかりと取り除かれ柔らかく



ジューシー。暫くすると、「何焼きますか」いよいよメインデイシユのモツ焼きである。「たん」「はつ」「レバー」「なんこつ」「かしら」「しろ」（モツ焼きは全て100円）を一挙に注文。

「お客さん初めてですか」と常連客が見るに見かねたように声をかけてくるのである。「随分食べますね……。ここのモツ焼きはかなりボリュームがありますよ……」。

よく見るとこの常連客は店のグラスではなく特製の錫製のマイグラスで飲んでいて、驚くことに店の割箸ではなく、箸箱入れ持参のマイお箸なのである。「マイグラスとお箸、凄いですね……」。「イヤー……、ほぼ毎日くるんでね……。他にも何人かいますよ……」と当然の様に意に介さない。

丁寧に炭で焼き上げたモツ焼きは、流石に美味確かにボリュームたっぷり。しかし今日は昼抜きであるので問題なく完食。勿論、モツ焼きにはホッピーでしょう……。

待ち客も増え続け店内の待ち席は一杯で、店頭にも列ができている。「じゃーお会計?」「1280円です!」「エーっ……」

壁にあるセピア色の写真を見ると、先々代の勘三郎が来店し店主と一緒に写真が堂々と掲げてある。矢張り本物は本物と呼ぶのだ……。

木枯らしに暖簾が揺れるモツの味

酔宵子

## ある自然科学者の手記 (36) 大橋望彦

### 「野辺地の三ツ星家」

明治四年夏の頃で御座いました。私の十一歳の時、以前父の下役であった吉野様が、野辺地から来られて、『野辺地町の三ツ星家主人から頼まれて参ったが、此方のお嬢様を、暫く御借りしたい。是非お連れ申すように』との口上で御座います。段々伺いますと、三ツ星家は野辺地きつての財産家であり、私が、亡くなられた三ツ星家のお嬢様によく似ているので、是非手許で愛育したい、という希望だそうに御座います。私にすれば、食うや食わずの昨今、三ツ星家へ引き取られれば、食べる丈は十分に出来ると、恥ずかしい事ですが、その時は左様に考え、亦、母は三ツ星家の真の好意が判りましたので快く承知し、野辺地の三ツ星家へ預けられたので御座います。三ツ星家に行つてからは、蝶よ花よと愛で慈しまれ、辛い事も無く、楽しく暮らしましたが、何分年端も行かぬ小娘、あばら屋住いでも、我が家わが母が恋しくなりますと、矢も楯もたまらず『田名部へ帰り度なつたから、直ぐに御送り下され』と、吉野様の所へ行つて頼みました。二・三日待つ様にと言われても、帰るとなれば、一時も待ち切れず、泣き出し、ましたので、吉野様も困つた挙句、『それ程言われるならば、明日囚人船があつて、その監視人を懇意にしているから、頼んであげましょう。然し、囚人と一緒の船で送つたと、奥様に知れては相済みぬ』と、心配顔でしたが、私か何でも早くと、頼みますので、とうとう吉野様も兎を脱いで、三ツ星家の許しを受け、囚人船に乗つて帰ることと致しました。

三ツ星家の主人等も、名残を惜しんで、何程かの金子を餞別としてくだされ、翌朝の船で出立致しました。其の時は、天氣が宜しかつたのですが、少々風が強う御座いました。

小さい船に囚人が二十人ばかり乗り、頼りに思うのは吉野様の知人丈です。昼過ぎになりますと、風が激しくなりまして。船は木の葉の様に波に揉まれ全く生きた心地もなく、まるで死んだように成つて仕舞いました。其の内に風の向きが變つて横に吹いてきましたので、田名部の方へは着けられず、6里先の川内へ日の暮れぐれに着きました。囚人は皆宿へ泊まりますから囚人と一つ宿へは泊められぬと、色々心配してくれ、或る商家へ私一人丈泊まらせられたので御座います。とうとう心細さに大声を挙げて泣き出してしまいました。然し、其の家の主婦が親切に、菓子を出して、色々慰めて下さつたので、漸くその夜を明かしましたが、翌朝も船で、田名部へ戻ると聞かされ、『船はもう懲々ですから、どんな難儀をしても、陸地をお連れください』と、我俣を申しました。その為囚人は船、監視人は私に付いて陸地を歩き、六里の道を草履履きで、随分苦しみながら、やっと田名部在の我家へ送られて帰りました。

折角懇望されて、三ツ星家へ迎えられ、何不自由無く暮らせたものを、自分の我俣から、突然帰つてきましたので、『あれほど自分から行きたがつたのに、二ヶ月も経たずに帰るとは、余りにも辛抱が無い』と、母から大変叱られました。

それから亦も山へ芝採り、海へ昆布採探し、亦是花籠を拵えて、これを売りに歩きました。東京等の縁日で、マツチを売る子供の様で、どうぞ買つて下さいと申して歩きますと、不憫な者よと求めて下さる方も御在りましたが、何分狭い土地の事と、二度とは買つて戴けません。その頃、母は筆屋に雇われ御飯を炊いたり、筆先を分ける手伝いを致して居ま

した。私其処へ折々参りまして、母から握飯を貰いますのが何より嬉しかつたのであります。母は常々、『何程貧苦に迫つても、操を破るようなことが有つては成らぬ、亦、決して盗み心を出しては成らぬ』と、堅く戒められたので御座います。

## 『光明』

そうこう致し、月日も過ぎて、明治五年となりました。追々土地に慣れ、私共の素性が判つて来ると針仕事を頼みたいと、依頼して来られる方も出来ました。以前泊りました菱千の世話で、山中、山キ等と言う大家へ、母と伯母が頼まれて行き、先方で食べて日当二百文か三百文を戴きました。その留守は、私がおのおのお守りを引き受け、手の暇を見ては足袋底を刺して、僅かながら賃金を戴きましたから、昆布の糧の要らない御飯を十分に食べられる様になりました。

さて、他所の家の様子はどうかと言うと、南部に移りました会津藩の方達は、何れ劣らぬ艱難を嘗められました。前にお話した養子の小太郎は、私共が南部に移ります折は、まだ幼年の事故、国に残して参りましたが、会津に居いられぬ事情があつて、田名部から二十五・六里南の五ノ戸と申す処へ、移り住んで居たので御座います。其の頃、元家老職を務められた山川大蔵様、後の陸軍少将山川浩様が、家中の者で困難に耐え苦学を志す男子は引き取つて書生とし教育しようと言われたのを聞きましたので、本人の出世の基と思ひ、五ノ戸の小太郎の元へ、その旨を伝え、山川様へ書生としてお頼み申しました。元々教養の無い親達ゆえ、養育躰が悪い為、辛抱出来ず、二・三ヶ月で山川家を出て来ましたから、抛所なく、五ノ戸の里へ帰りました。山川様の仰せでは、『小太郎は

愚鈍で、鈴木家の養子には、到底駄目である』と言われ、私は子供心にもそんな人を養子に等、嫌な事だと思ひました。此の年、藩政を廃して、県が置かれ、南部は青森県下と成りました。その頃、私共一家の艱難辛苦の有様が、青森県庁に迄聞えたと思ひ、県の大参事を勤める熊本県人、野田豁道、後には男爵陸軍監督総監になられた方が、大変同情して下さいました。『左様な難儀苦勞をしては、子供の学問教育も叶うまい、せめて長女でも、宅の方に引き取つて、修業させよう。』と、態々田藩の小川と言う方が訪ねて来られて、御親切なお話があり、是非御みつ様をお頼みに成つたらばと、勧められました。苦勞して来た母の事故、直ぐには承知致しません。みつも今年十二歳、追々年頃にもなる、青森等の三十里もある遠方へ一人手離して遣ることは望みません。と一応お断り致しましたか、小川様は、『大参事と言えば県令様の次の大官を勤める方、まさか不法な事はなるまい、然し、其れ程御心配なれば、よく聞き合はせて上、若し宜敷い方であつたならば、お頼みなされては如何です。』と、申して帰りました。

その後野田様から度々御話があるものと見え、小川様も再々足を運ばれ、また角田と言う方にも御話があり、此方も度々お越しになつて勧めて下さいます。『野田様丹は立派な奥様があり、亦、青森には御妾もある。慰み者にされる心配は決してないと思ふ。是非お頼みなされ。』言われますので、母も漸く納得し、早速御返事を差し出しました。野田様からは直ぐお手紙で、『女子の事故、親類の内の確かな人に送らせる様に』と、金子五両を旅費として封入してありました。何と、ご親切な方ではありませんか。私にとつてこれが開運の魁となり、暗夜に一筋の光明を見出す事と成つたので御座います。

## 絹の話 (54) 「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 絹の西進 シルクロードが拓ける

#### 【匈奴との闘い】

絹は4500年位前の中国の黄の国で野蚕繭から作られ始め、殷の時代の亀甲文字に桑、繭と読める文字がありますから、この時代には中国では既に檜の葉等を食べる大型の柞蚕と云う野蚕の繭から糸を採る事から、桑の葉を食べる小さな家蚕の基になるクワコの繭から糸を採る養蚕が始っていたといえましょう。

どうして大きな繭から小さな繭を選択したかというと、野蚕繭は一本の糸を引き出すのが大変困難で、糸が不均一で、伸縮も大きく、クワコ繭に比べると艶やかではあるが、しなやかさに欠けるので、次第にクワコを畜化して、白くてより大きな繭を選択し続けて来たのでしよう。以来2千年の歳月をかけ、家蚕による今日の絹を作り上げたのです。その頃になると世界の人口も増加し始め、各地の文明の融合がはじまっていました。

中国では農耕を主とする漢民族が台頭し始めていました。春秋戦国の乱世を紀元前221に、古く遊牧をして

いて定住農耕民になった秦が統一し、強力な国家を築きました。ところが秦は優秀な馬を手に入れて強力となった北や西に住む匈奴（モンゴロイド、前3世紀〜後5世紀、前209冒頓単于（ボクトツゼンウ）〜1000年が全盛期、同族に西のフン（4世紀後半ヨーロッパに侵入、民族大移動の始まりを作る）や、東胡（トウコ、春秋の時代から内蒙古を中心に活動した狩猟遊牧民、その末裔が鮮卑、契丹）、烏孫（ウソン、天山山脈北方で活動したトルコ系民族）、月氏（ゲツシ、敦煌〜中央アジアで活動）等の侵入による略奪、誘拐、殺戮を防ぐため、以前から各地の王朝が築いて来た万里の長城を東西につなげ、さらに強固にせざるを得ませんでした。

秦は遠交近攻の策を駆使ながら、外交に威力を発揮したのが「絹」でした。

#### 【セルと呼ばれた絹】

この時代北方遊牧民の服装はフェルトや毛織物、ヤクの毛の紐、馬のしっぽの加工品（はたき等）でしたが、万里の長城を超えた戦利品に見た事もない、えも言われぬ、美しくしなやかで軽い絹を手にしたのです。以来絹は北方各遊牧民の垂涎の品となったのです。猛威を揮っ

た匈奴の王(单于)の墓の副葬品に美しい錦の織物が有った事からもその事がうかがえます。秦においても漢においても戦うばかりでなく、外交に力を入れ、友好関係や同盟を結び平和を保とうとしました。その交渉に力を発揮したのが「絹」でした。月氏等は地の利の関係上、手に入れた絹を、隣国との交渉に利用して、またその絹がさらに西に渡り、ローマでは「セル」と呼ばれていた様です。セルを産する国をセリカ、その国人をセレスと言ったそうで、今日の「シルク」はこれが語源になったと言われています。

しかしローマの人はシルクが何から出来ているか判らなかつた様で、ローマの学者の『博物誌』に「樹により毛糸を紡ぐ」と記されているそうです。またセレスは当時、大月氏国の人を指している様に思えます。

この時代のローマの絹の価値は金と同じであつた様です。現代の繭3個が約1<sup>oz</sup>、(着物1着4千個使用)である事からすれば如何に高価であつたか想像が付きまします。

## 「シルクロードが拓ける」

世界の文明は長い間それぞれので独自に発展していましたが、紀元前5世紀アケメネス朝のダリウス1世が

東はインド、西は地中海、アフリカ大陸の今日のリビアまでの大帝国を打ち立てました。広大な領土を支配するために道路網を整備して情報収集、兵の速やかな派遣に力を注ぎました。その結果、それまで此処に発展をしていたギリシャ、ローマ、エジプト文明とメソポタミア文明の融合が始まりました。紀元前4世紀にはマケドニアの王アレキサンドロスはギリシャを平定し、ペルシアの時の王大流3世を破り、さらにヒンドウクシ山脈を越えインドに侵入し、インダス川を超えてパンジャブに達しました。ここに東西文明の交流が大きな流れとなったのです。この様な刺激を受け、万里の長城の中に閉じこもっているばかりでなく、交易により莫大な富みを手にする為、陸路のシルクロードも拓けて来たのでした。しかしそれを維持する為に各地に城壁を築き、兵を駐屯させ安全を確保する為に苦心を重ねたのです。

今日私達がロマンを感じてやまない、砂丘に埋もれたシルクロードの遺構は当時の強者どもの夢の跡です。

後世、唐の都の繁栄はその結果と言えるでしょう。また一方、東はジャンク船、西はダウ船による海のシルクロードも拓けてくるのです。

今日でも港、空港の活性化は繁栄のパロメーターです。

### 短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 四十四回

「月虹」 鮫島 満

### 二十二 板垣家子夫 4

思ほえば土用鰻も慎みて食ひ給はざりき病の後も

『礫底』昭和二十三年

暑き日は禿げしみ頭につぶつぶの汗ふき出して籠り  
み給はむ

大石田を去り給ひすでに九箇月とかく不沙汰になり  
がちにゐる

吾が張りて来し部屋硝子の日除紙その後誰が張り替  
へにけむ

題詞に「夏日小吟」とある。茂吉が大石田の人人に別れを告げて、板垣一人だけの付き添いで帰京したのは昭和二十二年十一月三日であった。一首目は、無類の鰻好きの茂吉でさえも大石田での病中はもちろん、病後も口にしなかつたというのである。

残り三首は東京に夏を過ぐす茂吉を偲んだものである。二首目は、暑がりやで汗掻きとして知られる茂吉の夏

の日々を思いやり、心から同情している歌で阿ある。

四首目は、東京世田谷区代田の茂吉の部屋のようにすを偲んだ歌である。直射日光や明るさ暑さを嫌う茂吉のため、大石田でしたように部屋の硝子窓に日除け紙を貼ってきたのだが、半年以上も経ったいま、誰かが張り替えただろうかというのである。

老懶を嘆くたよりを寄せ給ふ雪五寸ほど降れるこの

朝 『礫底』昭和二十五年

茂吉先生にかの日惜しみの蜂蜜を出せし和尚の面影  
に頭つ

蜜嘗める茂吉と濁酒酌む和尚この山寺に和みし思ほ  
ゆ 同・昭和四十年

茂吉には、帰京後の昭和二十五年には箱根強羅の別荘に滞在中、以後の箱根行きを不可能とする心臓喘息の兆候があつた。また、北海道北見で医院を営む次兄の計報に接して気力を失い、さらに左側不全麻痺に襲われた。翌二十六年には心臓喘息の発作、呼吸困難に襲われるなど急激に体力が衰えはじめている。

一首目からはこのような状況の中で自ら「老懶」を覚えていることがわかる。

二、三首目は、大石田滞在中に何度も足を運んだ黒瀧向川寺でのことを偲んでいる。結句で和尚を詠んでいる



が、ここからは機嫌のいい茂吉の面影が立ちあがってくるだろう。向川寺は、茂吉が大石田からは見えないと思つていた蔵王山を初めて見たところでもある。板垣は（随行記）に、蔵王を見つけた茂吉が「ここから蔵王山が見える。蔵王山が見えるんだなあ。蔵王という山は天下の名山だからな、君、いい山だよ、蔵王は。」と言つたことを記している。

夕飯の箸投げて立つラジオの前声はつまりてただ涙流る

『礫底』昭和二十八年

悲しみにうちひしがれし日の夜を月くもりさす白雪のうへ

部屋寒く籠り給へばある夜は寂しきこともわれに洩らしき

翁草尋めて春野を行きましきとぼとぼとして老いしみすがた

俛は紗の覆ふごとく果敢なくて聴禽書屋の庭も暮れゆく

紅葉には早き鳴子の峽を来つ地下足袋の君と靴穿く吾と

一首目と二首目は茂吉の死を知ったときの驚きを詠む「噫斎藤茂吉先生」である。茂吉が心臓喘息によつて世を去つたのは昭和二十八年二月二十五日午前十一時二十

分であり、それがラジオのニュースで報じられたのは午後七時であつた。そのニュースを聞いた時の悲しみを詠んだのが一首目である。初・二句に板垣の驚きが如実に表れている。

三首目に「ある夜は」とあるが、これは一、二度のことではなかつたであろう。茂吉が板垣に洩らした「寂しきこと」はひと言で言い表せるようなものではなかつたはずである。戦火を避けて昭和二十年四月に上ノ山に単身で疎開して以来、敗戦後も大石田に流氓とも思われるような状態で暮らしていること、身体の衰え、「アララギ」との関係等々「寂しきこと」は少なくなかつただろう。

四首目の翁草探しのことは板垣の歌に「この原に翁草をば尋ねにき花の過ぎしを二人知らずして」（昭和二十三年）があることは以前述べた。翁草は茂吉の好きな花の一つであり、「おきなくさここに残りてにほへるをひとり掘りつつ涙ぐむなり」「をさなくてわれ掘りにけむ白頭翁山岸にしてはやほろびつる」（『白き山』昭和二十二年）と詠んでいる。

六首目には「瀬見・鳴子峽」と題がある。茂吉は昭和二十一年に板垣を従えて最上町の瀬見温泉に三泊の小旅行をしている。そして「みちのくの瀬見のいでゆのあさあけに熊茸といふきのこ売りけり」と詠んだ。「地下足袋の君」とあるのは、野外に出る時の茂吉の決まつた姿を詠んだものである。

# 楽しい時間 30

山本紀久雄

## 2015年3月31日 オイスターカード…その二

前月は、ロンドンの交通ICカード名が「オイスター」とネーミングされているが、それは「The world is your oyster」という文言を持つ蘊蓄物語が背景にあり、そこにはシェイクスピアが関わっているらしい、とお伝えした。

その通りで、このフレーズ、ウィリアム・シェイクスピアの「ウィンザーの陽気な女房たち・The Merry Wives of Windsor」の中で使われたセリフである。

「ウィンザーの陽気な女房たち」は、シェイクスピアの喜劇、出版は1602年で「イギリスの市民生活を中心にすえた唯一のシェイクスピアの戯曲」といわれるように、イギリス人一般に親しまれ、この作品中の文言「The world is your oyster」が広く慣用句として使われている。この文言が登場するのは第二幕第二場の冒頭で

(FALSTAFF) I will not lend thee a penny.

(PISTOL) Why, then the world's mine oyster. Which

I with sword will open.

これを訳するよ

(フォールスタッフ) 3ペニーを貸さないよ。

(ピストル) この世は私のもの。剣を使って奪う

ことができよう。

となるだろうが、文言中 Open を使っているのは、オイスターの貝をこじ開けるといふ比喩とかけて、実際に奪うとことを意味にしている。従って「私は世界の頂点に立つ。あなたが

拒もうと、剣の力で奪うことができる」というような訳になると考える。

だが、別の解釈として「無理に思えることにも挑戦し、行動すれば達成できる」という前向きな見解にも使われ、もう一つは「本来自分には不相応なものも、力づくで手に入れることができる」という、やや強引で欲深い意味もある。

いずれにしても、「ウィンザーの陽気な女房たち」の台詞が原典由来となり、これらが文化重層的に構造化していき「The world is your oyster」は「この世はあなたの思いのまま」という慣用句として、イギリスで広く使われているのである。

しかし、一般的に日本人には何となく釈然としない。だがそれは、シェイクスピアに詳しくないからであって、イギリス人にとつてはこの慣用句が「この世はあなたの思いのまま」と理解するのが常識となっている。というところで、ロンドンの交通ICカードが「オイスター」とネーミングされたことに、ロンドン市民は違和感を持たない。

だが、私にはここが疑問として残った。このような慣用句があるとしても、オイスターカード名を決めるにあたって、最初から「ウィンザーの陽気な女房たち」から引用しようとしたとはどうい思えない。

多くのネーミング発想は、突然に浮かぶ場合が多いのではないかと思う。また、アイディアというものは論理からでなく、他の要因、それは「何かのテーマを、ずっと考え続けていると、ふとした瞬間に、ああ、これだ！」と、突然に頭の中にイメージ発生するのではないか。私の過去経験からそう確信する。

だから、多分、オイスターカードを提案した人も、そうで



はなかつたかと推察した。

そこで、この提案者に会って確認したくなった。

この調査は難渋を極めたが、とうとうハンプシャーにネーミング提案者が住んでいることが分かった。早速、電話したところハンプシャーのアルトンに來れば会ってくれることになり、午後にはアルトンへ向かった。この日は午前中、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(DCU)にいた。DCUは世界大学ランキングにおいてトップクラスを維持し、ノーベル賞受賞者を多数輩出している大学である。また、DCUの中庭ジャパニーズガーデンには、伊藤博文、井上馨など日本人24名の名前が刻まれた記念碑、海外渡航が禁じられていた当時、国禁を犯し、長州藩5名、薩摩藩19名の若き志士が英DCUで学んだことを讃えて建てられたものである。



DCUからはバスでウォータールー駅へ、そこからアルトンへ。乗車時間1時間10分。寂しいアルトン駅前で立っていると、向こうからとても汚い車バンが走ってきて、目の前で停まった。車の中から長身やせ形の男性が出てきて、握手する。この人がオイスターカードのネーミング者アンドリユー・マックラム氏で、大きな広告会社に所属している。どこかカフェがないかと探したが、いずれのカフェも駐車出來ない通りに位置しているので、自宅に連れて行ってくれた。周りにあまり家が建っていない道路端の一軒家である。

ドアを開けると大きな犬が出てきて、長靴をくわえる。これは散歩に連れて行けというシグナルだとマックラム氏が言う。

中に入るとキッチンとテーブル。雑然としているが、これがイギリスの普通の家の状況だ。犬が人懐こくすり寄ってくる。毛がこちらの洋服にまといつく。猫はテーブル上の上ってくる。ペットと人間は共同生活で、日頃から一緒にしている。人間も床のまま歩くのだから、犬も猫も同じである。さて、最初の発言はメタファーMETAPHORだという。コンクリートのイメージ、中にいるいろ入っているという比喻・暗喩だという。ロンドン交通局から広告会社にネーミング作成があったので、マックラム氏他数人で2001年にプロジェクトをつくり検討し、提案内容が2002年OKとなり、カード利用の機械整備と準備し2003年7月からスタートした。

ネーミングについてはいろいろ検討した。最初はパルスPulse、これは手首の脈で、これが有力だった。ヴィアウェイVIA、これはを通過して・経由の意味だが、何かまだ十分でないと思いつつ考えていると、ふと、香港のオクトパスを思い出し、そこから突然にオイスタを思いつき、チームリーダーの女性に電話したところ賛成してくれた。

これらの経緯からわかるように、よいネーミングがないかと、集中して考えていた時に突然にオイスタが浮かび、その背景根拠としてシェイクスピア慣用語を使用したのだ。やはりそうだった。新しい発想をするということのセオリーは、テーマへ集中度を増していくと、突然に脳に浮かんでくるものである。このように解明にトライするのも「楽しい時間だ」。

## 伊賀上野(2)

夏目勝弘

芭蕉記念館も俳聖殿(国の重要文化財)も一人のみ、静かななかで思いを集中できた。

忍者屋敷からの騒音が聞えてくる。だんだん声等が小さくなり城に向う木暗い坂ではもう聞えない。

坂を上りつめた広場から石垣を修理するような音がする。

藤堂高虎の分城であったものを、徳川家康の大坂城攻略の拠点とするため改修を命ぜられた。改修前の三倍に拡張され水濠を設け高さ三十メートルの石垣をめぐらす。

五層の天主閣は完成間近に台風により倒壊、今の天主閣は模擬のものである。

天主閣の内部はあまり興味がないため中に入らず石垣を見て回ることにする。

天主閣の石垣は分城のためか、また完成を急いだためか、一見雑な石垣のようだ。

天主閣を支える石垣となると基礎が大切である特に根石が尤も大事となる。しかしこの根石は大石など使われずどれも皆同じ大きさ形で無造作に積まれているように見える。

石と石との間が五センチから十センチも開いている。石と石との空間には小石を詰め込んである。

このような天主閣の石垣を見るのは始めてで、名築城家の藤堂高虎の工夫があるのではないか、高石垣には「蛇口」という「厄介水」を逃がす、はけ口を設けなくてはならない、その「蛇口」が見付からない。

石と石の空間に小石を詰め込めるのが「蛇口」をかねているのだろうか。

浅い知識をめぐらせながら天守閣の石垣を真横から見透か

して見ると中程に少しハラミが出ています。いずれは補修が必要になるのではないかと、素人考えの心配をし、三十メートルの高い石垣を見に濠の水辺まで下りる。

角のみは与勾配に算木積み、その算木積みも少し変っている。一本の長方形の石を算木に積むのではなく一つ間隔に二個の四角形の石を並べて積んである。

高くする為の工夫なのか、知らないことの多いがこもこも考えを思いめぐらせながら城山を下り、街に出た。

昼食を思い店を探すと食堂らしい所が無い、場所が悪いのか、警察署の前に小さな食堂があった。どこでもよいので入り、焼ジャケと少しばかりの野菜いためと汁の一品のみの食堂で昼食をすませた。

ここに来て芭蕉を感じられないのは、生活が旅ばかりのためか江戸に出て十二年目の帰郷、伊良湖を名古屋を経て伊賀上野に着いたのは四十四歳。「おくの細道」の旅を終え大垣より九月下旬に伊賀上野に帰郷。四十六歳。

元禄三年正月三日、膳所を去り伊賀に帰る。四十七歳。そして元禄七年五月十一日、故郷への私用を兼ね、長崎へ行く目的で旅に出た。

生家の裏に門人たちが「無名庵」を建ててくれ。句会等をかさね、奈良で重陽(九月九日)を向えるための伊賀を立ち大阪に向う。

大阪で病にそして「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」が「辞世の句」とされ、翌日に先日園女のところまで詠んだ句が気にかかり改作した句が

○清滝や波に散込青松葉

これが芭蕉の「辞世の句」ではないかと思う。芭蕉の言葉に(有限なる世界に生きそのなかに無限なるものを発見すること)無限なるものを死が間近に迫り啓けた境地かとも思う。

## 「氷魚」のことから (172) 岡本八千代

今日、見上げた空は淡い水色の空であった。もうすぐ、三月二十七日、島木赤彦の赤彦忌である。本名は、久保田俊彦。長野の人で、伊藤佐千夫に師事。そして、アララギの主要同人であった人。歌集に「氷魚」があつて、私はそれを読んでかなり感動した。

今、毎月書いている「『氷魚』のことから」の「氷魚」はそこから始まっている。

かくして、子規の「写生」論の追究、それはまた自分自身の生き方に及びつつ現在の現実となつていよう。

つい最近、松山の子規記念博物館長先生から、「下村為山一子規派の画人」と題しての美しい目録を送つていただいた。期日は、一月三十日に了つてはいたが、為山の画報、デザイン、為山画賛、書画(その中にある俳句、書)等々、色彩写真になつていた。芸術性高い記念展であつたことを知る事ができた。

又従兄弟の三並良氏は子規は病床で絵筆をとつて、自ら楽しんでた。恐らく今残つているものより、ずっと沢山描いたと思う。死後にこんなものが残るのは、いやだと云つて、多く自分で破棄したやうだ。」と言つてゐる。また子規がそのようにたくさんの絵を描いたのは、「絵の修業を彼は少年時代にやつて居たのである。これらは今日云う所の精神分析学から見ても考えられるものもあるやうと思つ。」と言つてゐる。

また、良氏は子規に、ゲーテのファウストの英訳を贈つたことがあつて、彼は之を読んで、「韻文と散文との部分が交错しているのが面白いと云つて読んでいた」と言う。

良氏は、「ファウストも悲劇とはなつてゐるが彼の世界観、宗教観を述べた長編の詩であつて、普通謂うところの小説ではない」と。

ちなみに、ここに、三並良氏のことをつけたしておく、慶応元年伊予松山に生まれた人。ドイツ語学者にして哲学者。子規の従兄弟半。第一高等学校、松山高등학교教授を歴任した。昭和十五年没。であつた。

△子規の明治11年(十二歳)の時の詩

※聞子規 (子規を聞く)

一声孤月下(一声、孤月の下)

啼血不堪聞 血をはきて啼けり聞くに堪えず

半夜空敲枕 半夜、空しく枕に敲りぬ

古郷万里雲 古郷は万里の雲

この頃の子規は、毎日五言絶句を一つずつ作り、観山翁没後の素読の師であつた土屋久明に添削を乞うていた。その最初の作品である。子規は自分のペンネームを子規と思いつく前の十年も昔にこの詩があることは偶然にして偶然でないような不思議がある。

子規はその頃、先生から自分の詩に朱を入れてもらうと、朱と黒の交わる自分の詩に、美しさを感じて、「自分も早く年を取つて詩を作るようになりたい」と思つていたらしい。

子規の文学趣味は詩作に端を發して、十三歳、松山中学へ入学していつそう發展させた。(次号へ)

# ことのはスケッチ (437) 今泉由利

## 『天田愚庵』④ 年譜

「天田愚庵」③年譜において、書き残した逸話を追加。

### △明治元年（一八六一年）愚庵十四歳。

○太田垣蓮月尼は、西郷隆盛を知ったのは、戊辰の役が突発し、薩長が先陣をとり京の都を出発しようとした時のこと。

馬上の島津公が三條大橋にさしかかろうとした時、橋の西詰に身を潜めていた七十八歳の蓮月は、槍をたててゆく護衛に向い、真紅な短冊を「公に取り次ぐよう」渡そうと試みた。

護衛は槍で祓おとしたが、「老尼であるならば」そのまま行かすと、次の馬で追っていた大の男が「何でござす」と。

蓮月は短冊を奉げ、「蓮月と申し、目出度ご出陣と存じ、お取次ぎのほどを……」

西郷隆盛は、馬上から受け取り、一読。その短冊を左手に高くかざすと、声に出して読みあげた。

「あだみかたかつもまくるも哀れなり同じ御国の人とおもへば」

同じ味方と出陣を祝うのであっても、味方にも仇にも、ともに同じ哀れを注いだもので、隆盛はこれを快く受け入れたのだった。

「この短冊はたしかに取次ぎます」と声をかけた。

先陣が大津に一時泊した際、蓮月の一首が話題になり、諸将たちは協議をし重ねた。

「正しい未来を迎えるためには、今、討幕のことよりないがよい結果が得られるのであれば、仇味方ともに鉾をまじえ

ることなく徳川を下した方が良いにきまっている、幕府とも談判に尽くし、その上のことにしても遅くはない。蓮月の一首は、それを教えてくれている」西郷隆盛がしめくつた。

このことが大きな転換をきたし、大交渉の道が開き、山岡鉄舟らを動かす結果となり、遂に徳川幕府もこれを最後に無血のまま江戸城を明け渡すことになった。

当然起るはずであった江戸百万の死、血の海を見ずして大偉業をなしとげ得たのだった。この三條橋の上の直訴のことは、美しく全国にひろまっていった。

参考資料  
漂白の歌人僧、愚庵、蓮月尼伝  
真下五一

### △明治十一年（一八七八年）愚庵二十五歳

○板垣退助らの創立した愛国社の同志として、商人に変装し、京都、山陰道に入り、大阪に暫く滞在。その間、すでに前科一犯の愚庵の政治活動を心配した山岡鉄舟の書状を受け、静岡の宿舎で対面。

○清水港の俠客・次郎長、山本長五郎に愚庵は託せられた。

○明治十二年（一八七九年）愚庵二十六歳。

○関東・東海・近畿に縄張りをもつ親分衆に、父母妹の探索に力をもらう。

○衣食住が保証され、父母妹探しに打ちこめ、愚庵に安らぎがもどり詩歌への創作意欲が目覚めた。

○富士裾野の開墾地大淵村（富士市）は清水から十二里余り、徒歩一日の行程。

○愚庵は、次郎長への感謝に、次郎長の伝記を書き残したいと「東海遊俠伝」（次郎長物語）（仙石衛門と大政からの聞

きとりが中心。)

○詩作歌作(漢詩四十六作品、短歌五十首)を「戊寅口占」と出版。

○せこやこひし勢子や恋しとおもふより夢に入りしかあはれ

我妹子

○「次郎長伝」を鉄舟に預けた。

○兄と連名で諸新聞に「父母妹」の搜索を、懸賞金百円の広告をだす。日本初の懸賞金広告となる。

○鉄舟の保証にて、浅草の写真師、江崎礼二に入門。写真術を学ぶ。

○琉球王国の消滅。沖縄県となる。

△明治十三年(一八八〇年) 愚庵二十七歳。

○小田原に写真館開業。おおいに繁盛した。ついで旅行の写真師となり、熱海、伊東、河津、川奈、下田、松崎、修善寺、三島を経て東海道、京都に至る。さらに近畿を巡り、

東山道、甲信地方を回り、東京に出、次で郷里平まで。父母妹の手がかりはなし。

○小車の廻り逢へずに十年余り歳の三年となるぞ悲しき

△明治十四年(一八八一年) 愚庵二十八歳。

○国会開設される

○「東京曙新聞」に再び父母妹捜索の新聞広告をだす。

○次郎長の懇願と鉄舟のすすめにより、写真師をやめ、正式に山本家の小政、大政につぐ三番目の養子となった。

○開墾地を農地に変え、養鶏場を建てるなど新たな試みに意欲。

○法律学校で知り合った陸羯南、国分青崖、加藤拓川、福本日南らが富士山に登ったことを知る。

○愚庵も富士山頂を目指し、山頂に立つた。風景がそのまま言葉になり、長歌、反歌となる。

○水無月二十日、不二の高嶺に登り詠める歌。

なまよみの かひの国 うちよする するがの国と ふた  
国と かけてたふとき ふじがねに のぼりてみれば  
玉久しげ はこねの山も あしがらの やまをもやとみ  
えわかぬ それをおもへば とりが啼 ひがしのそらのう  
ちひさす 都はいづらと あまのはらふりさけみればは  
るばるに さだかならねど すみだ河 ほそぬのしくと  
おもへらく 我ふるさとを 草まくら たびねなだらに  
みることの そのうれしさよ そのうれしさよ

ふじがねにのぼりて四方の国みるもまづふるさとの空をたづねて

△明治十五年(一八八二年) 愚庵二十九歳。

○次郎長経営の富士裾野開墾事業の監督になる。

○酸性土のため農作物が思うように育たず、赤字経営が続き困難をきわめた。

○正岡子規(十七歳) 松山中学を中退し上京。陸羯南の家に出入り始める。

○上野動物園開園。

△明治十六年(一八八三年) 愚庵 三十歳。

○次郎長にかかわる養魚場の訴訟問題に、愚庵は法律を精読し、解決に奔走した。

○囚徒や博徒を使つての開墾事業は困難を極めた。

(つづく)



## 編集室だより【二〇一五年 三月】

☆三河アララギ賞 内藤志げ 様

次々に太陽隠す雲速しそのたまゆらの日の射す窓に

大きなお心の内に農作業もご家族も天地宇宙もつつみ  
込まれ、そこからほとぼしるお言葉が素敵です。

○ドイツの首都、ベルリン・ウラニアにて開催された『ジャ  
パンフェスティバル2015』に、震災復興支援、福島県  
会津漆塗の額縁入りの私の短歌も参加した。日本始まって  
以来の文化が世界に出掛けたいしさを味わっている。

○ボランテアみたいなことではしばしば熱海へゆく。その海  
岸線にハカランダが多数植えられている。すでに大木になっ  
ている木もあり、上品な淡紫の花に出会えた時は、なつか  
しかった。丸い種実になった時はうれしかった。全部葉っぱ  
を落してしまつた時は、次の芽生ばえが待ちどおしかった。

○ソメイヨシノの原木か。上野動物園表門前に植えられてい  
るソメイヨシノ一本とエドヒガン系のコマツオトメ、など  
桜六本が、植木職人が優れた品種を作りだすため交配して  
きたものを植えたのではないか。これがソメイヨシノの原  
木となり広がついていったのではないか。ソメイヨシノの樹  
齢は百年程。

○桜の飛鳥山の山すそ、『ピストロ・ドウ・マーク』フラン  
ス人のシェフのフランス料理店。エスカルゴ、鴨、ステー  
キワイン…。美味。

○国立科学博物館、大アマゾン展。アマゾイ河を船で下った  
こと、アマゾンのジャングルを歩いたこと…なつかしい。  
化石として残った動物。今の動植物。アナコンダ、アルマ  
ジロ、ミユビナマケモノ、アマゾンカワイルカ、ピラニア、  
ナマズ、メガネカイマン、ミナミコアリクイ、コンゴウイ  
ンコ、オオウスバカミキリ、ヘレナモルフオ、巨大カブト  
ムシ、ピラルクー、プライーバ、水草、菌類、樹木…日本  
に無いものばかりに親しんでいたんだな。

○飛鳥山吟行。今年は、桜が二花、二花。蕾から花開いてゆ  
く様子を見つめてゆきたかった。蕾ばかりだった蕾が開  
きはじめ、瞬きの間にも花が増し、教えきれない程に花開  
いてゆくのだった。  
後、生粉手打ちそばの越後屋で「そば懐石」をいただき、後、  
句会。おもしろくなってきた。

○シャンソンの「Salon・de・えとわーる」の「市ヶ谷外堀  
お花見会」に紛れていた。  
土手の桜古木は満開、花々の花の影に頼るあたたかさ。花  
見の後の、シャンソン歌手の方々とのお花見弁当は趣があつ  
た。「さくらんぼの実る頃」を思うのでした。

○飛鳥山ではじまった。花見は、市ヶ谷外堀、千鳥ヶ淵、靖  
国神社、音無川を板橋までさかのぼり、小金井公園、上野、  
目黒川、洗足、東工大…何万本かの桜古木に近寄った。

## 和菓子街道 (103)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(26)

子供の頃、祖母の家でよく見かけたお菓子というと、那智黒飴と生姜糖だった。どちらも誰かしらの土産だったようだが、今ではあまり見かけなくなってしまった。その懐かしい土産のひとつ、生姜糖が伊勢名物と知ったのは、ずっと後になって歩いて伊勢に参った時のこと。

平成5年におかげ横丁ができる以前は、伊勢土産といえば岩戸屋の生姜糖だった。元々、伊勢で生姜糖が作られるようになったのは、江戸時代の延宝年間(1673～1681)、または寛政年間(1789～1800)といわれている。日持ちのする生姜糖は土産として好まれた。煮詰めた水飴と生姜の汁を神宮のお札「剣先守り」(剣菱)に似せた型に入れて固めた生姜糖は、ぴりとした生姜の風味が甘さを引き立てる。

江戸時代から続いている生姜糖の店は今は残っていないが、明治



43年に牧戸浅吉が開いた岩戸屋が、現在の最古参として商いを続けている。店頭に並ぶ剣菱型の生姜糖を手にとると、今は亡き祖母の顔が浮かんだ。

二見浦の夫婦岩(抹茶、緑)、その間から出た太陽(ニッキ、桃)、千鳥の舞う空(生姜、白)を組み合わせ、剣先守り型の中に夫婦岩の日の出を表した生姜糖。

#### ◆岩戸屋

住所：三重県伊勢市宇治今在家町58

電話：0596-23-3188

## お知らせ

▽六月号の原稿は、五月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集三河便り

▽年度替わりの慌ただしさのうちに四月になり、はや五月号の発刊となりました。

草木の芽が萌え出し、すべての生物が、生き生きとしてくると言われる季節です。

休耕田の小麦も伸び、吹き渡る風にみどりの葉が光っています。この季節を大いに楽しみたいものです。短歌も自然にできるような気がします。精進したいものです。

かぜむかふ<sup>けやまむかき</sup>樺太樹の日てり葉の青き  
うづだちしまし見て居り 斉藤茂吉  
(山口)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年四月二十五日印刷 第六十二巻 第五号  
平成二十七年五月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘  
平松 裕子・山口千恵子・森岡陽子  
今泉由利

### 発行人

三河アララギ会

〒一四一〇〇三二

三河アララギ発行所

東京都北区王子本町一の二六の六A

### URL

T E L (〇三)五九二四一〇六五  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三三九  
E-mail yuri88@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 核創美